

# 正常位が嫌いなカノジョ

淫らなピュアボディの  
メガネっ子カノジョも  
正常位にドハマリしてしまう、  
難しくて簡単な方法とは……。

微乳

正常位

めがねっ娘

中出し

連続絶頂

精飲

後背位

イチャラブ

adults only

手コキ

カラー挿絵付きライトノベル作品

「ふう……ようやく定期テストが終わったぜ」

「テスト明けの開放感はたまらないわね」

オレはユウ。

K学園に通う男子校生。

今日は学園の秋の定期考査が終わった直後の週末で、外はよく晴れていた。

厄介ごとを片付けたオレは、午前中から恋人のリョウコを自宅の居間に呼んでいた。

テストの打ち上げとして、ふたりで遊びに行こうと前から決めていたんだが、その話を詰めるのだ。

「なあに？ わたしをじろじろ見て……顔になにかついてる？」

「いや、お互いテスト勉強で忙しくて、最近はゆっくり会うこともなかったろ。だからだろうな。リョウコの私服姿が新鮮でさ。学園で見る制服姿も最高だけど、やっぱりお前はマジ可愛い！」

「な、なによいきなり……ばかっ……ユウのばかあ……ッ」

リョウコは悪態を吐くが、照れ隠しだなこりや。



顔を赤らめ、ちよっぴり瞳を潤ませてるのが証拠だ。

彼女とは同じ学年なもの、クラスは違う。

知り合ったのは、学園の委員会活動……図書委員で一緒になったことだった。

物静かでほとんど表情を変えない女子だが、真面目で仕事をさぼらない。

メガネをかけていて、あんまりオツパイが大きくなって、派手さはないけど、いつも清潔感がある。

純白のリボンでポニーテールにしてる髪は、シャンプーのCMに出る女優並みにサラサラ。肌は陶磁器みたいに白くてきめ細かい。近づくと、爽やかな甘い香りが鼻腔をくすぐる。着てる服だって、いつもおろし立てみたいだ。

そういうのが、オレのツボにはまってさ。性格面も問題ないし、他の男子に魅力がバレてとられる前にと、オレは気持ちを決めて告白した。

でも、断られたんだよなあ。

後で本人から聞いた話によると、当時の彼女は、自分を魅力も価値もない女だと決めつけていて、オレの告白を悪戯の類いだと考えたんだそう。

けど、オレは諦めなかった。

それからアタックし、三度目の告白でオーケーをもらった。

付き合い始めてから、半年になる。

「ただだけ見ても飽きそうにないけど、見てるだけじゃもったいない。話を進めるか…  
…まあ、自分の家だと思ってくつろいでくれよ」

オレはリョウコの丸くて華奢な肩を抱いて、一緒にソファーに腰を下ろした。

「今度はどこ行こっか」

リョウコは頬をほんのり桃色に染め直して、こちらを向いている。

うん。

間近で見ると、一段と可愛いなコイツ。

相変わらず、肩の抱き心地もいい。

ふたりは今、身体の側面で…ワキから腰にかけて密着している。

お互い、秋服を着ているけれど、布越しにも女子校生の肌の柔らかさと温もりが伝わってくる。

くうっ！　こういうスキンシップは、何回しても気持ちいいぜ。

しかも彼女が、ときどき恥ずかしそうに目を泳がせたり、もじもじと身じろぎする仕草や、それでも離れようとしなない態度が、堪らない。

スンスン…アロエ系のシャンプーの匂いもいい感じだ。

……うん？ シャンプーの匂い？

「もうすぐ、ユウの誕生日でしょ？ わたしと付き合い始めて最初の誕生日なんだし、ちよつと豪華なところへ行こつか……それから、プレゼントも……」

リョウコは嬉しそうに提案してくれる。

委員の仕事をしてるときも含め、学園では寡黙で淡々としている彼女も、オレといるときだけは、年相応に明るくいてくれるんだよな。

それもイイんだよ。

オレだけに、本来の姿を見せてくれるというところがさ。

「そういう話もいいけど……オレたち、テスト前は勉強ばかりしてただろ？」

「うん？ ええ……そうね……会っても、テスト勉強テスト勉強で、遊ぶことはなかったわ」

「だから、溜まってる」

「……ちよつとユウ」

「エツチしようぜ、リョウコ」

おれはおどけて言つて、でもグイツと本気でリョウコを抱き寄せた。

「今日、うちの家族は夜まで帰つてこない。時間はたっぷりあるんだ」

「時間があることはいいことだけど……だ、ダメよ……」

「なんで？」

「だって……会ってすぐだなんて……早すぎるわ……」

あとならいいのか。

実はオレたち、童貞と処女じゃない。

付き合ってから一月後くらいに初体験を済ませてからは、息をするようにやりまくり中。若くて健康な男女だもん。当然だよな。

遊びの計画作りも大切だけど、今のオレの最優先事項はエッチすること。だから粘った。

「そんなこと言って。リョウコだって期待してたんだろ」

「ッ……ばかっ……女の子に、なんてこと言うのよッ」

「だって、シャンプーの匂いを漂わせてる。オレとエッチするのを見越して、身体をキレイにしてから出かけたんだ。うう、なんていじらしいカノジョだよ」

「そういうあなただって、社会人が使うお値段高めのボディソープとシャンプーの匂いをさせてるじゃないのっ」

「オレのヤル気さ。ついでに言うと、この家中も掃除済み。ホテルにだって負けない居心

地だと自負するぜ」

リョウコは感心混じりに嘆息する。

「それは家に上がらせてもらってすぐに気付いたわ……ほんとダメよねあなたって。男がいる友達の話をよく聞くけど、その辺のカレシはそこまですらないって」

「オレは見た目が悪いから、そーいうのを頑張って、女が離れないようにしてるのさ」

「女にとっては嬉しい心得だけど……別にあなたの見た目……そんなに悪くない……」

「ん？ なに？」

「なんでもないわ。とにかく、スるならどこへ行くか決めてからよ」

「えー」

「えーじゃない」

会ってすぐにセックスするふしだらさに、年相応の拒否感があるのだろう。

彼女は強情だが、顔は赤面したまま。

依然として、オレに肩を抱き寄せられている。

満更ではない印だ。

それでオレは押してみた。

「頼むよりョウコ。ほら、ココ触ってみ？」

「ちよつと、なにを……あ……」

オレは隙を突いて彼女の手を取り、その白魚のような手指を、股間に導いた。

可愛いカノジョとふたりきりでいるオレのヤル気は、とつくに逸物に漲ってる。リョウコは気付かなかったみたいだが、ぶっちゃけ、顔を合わせる前から勃起していた。

ズボンを突き破らんばかりにそそり立つペニスに触れ、彼女は静かに息を吐く。

それは熱く湿っていた。

「なによ……いきなり、こんなにして……」

感触を確かめる風に、楽しむようにさすり始めたことから、オレは彼女の手を自由にしたら。

それでも、彼女の白魚のような手指は止まらない。

「溜まってたって言ったろ？」

「オナニーくらいは、してたんでしょ？ 男の人って、三日で精子が満タンになるそうじゃない」

「するわけないだろ」

「え？」

「お前みたいな可愛いカノジョがいるんだぜ？ テストが終わったら、ありったけをお前

とのエッチで出すと決めてたんだよ」

彼女の頬が一段と赤くなった。

「うう……この硬さ……この脈動感……ウソじやなさそうね……本当にすごく溜まってるんだわ……」

「我慢するのに苦労したぜ。寝ててもお前とエッチする夢を見て、危うく夢精しかけてさ」

「そこまでのなの……？」

彼女はちよつと黙り込んだ。

ややあつて、視線を斜め下に落として、ぼつぼつと言う。

「しよ、しようがないわね……」

「おっ」

「わたしも……結構……溜まってたし……どうせヤルんだから、今してもいいわよね……気持ちよくスッキリした後でだって、遊びの計画は立てられるし……」

「やいい！」

オレはすつくと立ち上がり、根負けした彼女をお姫様抱っこした。

彼女が裏返った声でした羞恥の抗議を無視し、そのまま自分の部屋へ連れ込んだんだ。

「あんまりジロジロ見ないでよ……」

「そりや無理つてもんさ。だって、すこぶる色っぽいんだから」

「もう……ばか……」

オレの部屋に入ったふたりは、さっそく、服を脱いだ。

といつても、恋人同士なんだから、風呂に入る前みたいにやったんじゃない。

脱がしっこさ。

服を脱がせ合うなんて、普通はしないことをするドキドキ。

しかも、エッチするための準備とくれば、興奮しないわけがない。

オレたちは生まれたままの姿になって、赤面していた。

「ねえ……わたしのカラダ……ほんとに……いい？ 他の子みたいにオツパイは大きくな  
いし……メガネをかけてるし……」

自分のだけでなく、オレの衣服も几帳面に畳んで脇に置き、それから、女体がよく見えるように向き合ってくれているリョウコは、おずおず訊ねる。

発育が悪いと思ひ込み、それが劣等感になつてる彼女は、よく聞いてくるんだよな。

オレはいつものように、言っただけだ。

「イイに決まってるさ。お前は足りないと感じてるようだが、オツパイは結構あるじゃないか。おまけに、乳肌はキレイでイイ匂いがして、形も果物みたいに丸くて美しい。メガネはよく似合ってる。知的さと清楚感が倍増って感じだ」

確かに、他の女子と比べたら彼女のバストは小さめだ。

JCクラスと言っている。

でも、口で言った通りの長所を持っている。

言えばさわられるオツパイだしな。

見られるだけで、さわれない巨乳なんかとは、次元が違う女神パイというわけだ。

「ふふ……ありがと」

気持ちは伝わり、彼女は安心した風に微笑した。

オレもほっとした気分になったよ。

カノジョが不安を抱えているのは恋人としてイヤだし、そんな心理状態ではセックスを  
楽しめないからな。

「そんなお前だから、ほら、この有り様なのさ」

オレは腰に両手を当てて、前後左右にゆっくり振る。

ぶらーん……ぶらーん……。

動きに合わせて、股間の逸物が弧を描く。

男のシンボルはとつくに勃起し、エッチを楽しむためのチンポに変身済みだ。

「もう……ばかつ」

リョウコは今度は、ちよつと呆れたように笑う。

彼女はオレを仰向けにベッドに寝かせた。

もちろんベッドはメイク済み。ホテル並みの仕上がりだ。

エッチしようというのに、みすぼらしい寝具では、女は興ざめするからな。

下準備に抜かりはないさ。

「テスト勉強中も禁欲してたのよね……辛かったでしょ？　そこまであなたを駆り立てた

魔性の女として、最初に面倒みてあげるわ」

悪戯っぽく口角を上げた彼女は股間に陣取る。四つん這いだった。

察してオレは足を広げた。

枕を頭の下に置いて、仰向けでもリョウコの様子がよく見えるようにする。

同年代では小振りの双乳も、重力に引かれて紡錘形気味になっている。

ボリユーム感はマシマシで、なかなかの迫力だ。

うへへ。

先っぽのピンク色の乳輪と乳首も色っぽいぜ。

円柱形の乳首も含め、先端はオツパイと釣り合いの取れたサイズなのだ。

服を脱いでエッチする間柄のオレしか見られない……他の奴らは見たことのない、一日見たって飽きない逸品さ。

「始める前からこんなに……ズボンの中で、こんなになっただけだなんて……」

リョウコは白魚のような手指で、オレのチンポの竿を掴んだ。

オレたちは学生だが、エッチはたくさんやってる。

力加減は心得ているだけに、彼女の握り方に痛みはない。

まるで、自分の利き手でオナニーするときみたいな安心感があるけれど、男とは別次元の柔らかさとしなやかさを誇る女の手指で掴まれるのは、自分で握るとき以上の快感だった。

びくっ……びくっ……。

チンポに甘い快感が走り、しゃくりあげる風に跳ねる。

「あん……掴まれただけで、この反応なの？ 相変わらず元気なんだから」

彼女は嬉しそうに微笑すると、手コキを始めてくれた。



しゅっ……しゅっ……しゅっ……しゅっ……しゅっ……

勃起とともに皮が剥けて露出していた、若くてまだまだピンク色の亀頭から下の部分……竿の全部を、丹念に手ピストンしてくれる。

これは準備運動と言わんばかりに、ゆっくり扱いて刺激してくれた。

扱き方は手慣れていて、オレの性感は順調に上がっていく。

「これこれ。こういうのが欲しかったんだよ。リョウコの手コキは最高だぜ」

「まだ始めたばかりじゃないの……んっ……」

彼女はチラチラこちらを見ながら手コキしてくれている。

やっぱり、見つめ合いながら性行為した方が、気持ちに通じてる感じがして、快感は上がるからな。

彼女もオレも、それは分かっている。

分かった上でしてくれてるというのに、一段と愛情を感じるんだよ。

好きな男を気持ちよくしたいという印だもんな。

「すんすん……お風呂に入ったとき、ココもちゃんと洗ってくれたのね……ボディソープの匂いがするわ……んふ……ん……」

「そりゃ、リョウコとエッチする気だったもん……ふう……」

「でも、ボディソープの匂いに混じって、ナマのオスの匂いがする……はあ……嬉しいオスのオチンチン……いいえ、こんなにもいやらしい性器は、チンポと呼ぶべきだったわ……はふ……嬉しいオスのチンポにご奉仕してるって感じがすごくする……う」

「わるい、臭かったか？」

「ううん、批難してるわけじゃないの……んっ……すんすん……すーはー……いい匂い♥」

「だよな。リョウコは、オレのチンポの匂いに興奮するタチだもん」

「ばか……ほんとのことでも、女の子にそういうこと言わないでよ……もう……はあ……はあ……」

リョウコは唇を尖らせるが、手コキは続けてくれている。

義務的にやってると感じる感じじゃない。

本当にオレのチンポを評価して、奉仕するのが嬉しいという雰囲気、手淫してくれてるんだ。

その証拠に、彼女のほっそりした頬が、汗を浮かせて紅潮し始めた。

「あなたのチンポって、かなり大きいわよね……んふ……カレシがいる友達の猥談を聞かされるけど……サイズはどうやら、成人男性の平均程度で十三センチ前後……でも、あなたのは、二十センチいってるわ……はあ……はあ……はふ……」

「へへへ……パツとしないオレの数少ない取り柄だな」

「おまけに勃起すると、鉄みたいにかチカチになつて……他の男子の中には、あまり硬くならなくて、柔らかいままという人もいるそうなのに……ああ……手コキしてるだけで、手が気持ちいい……変な気分が大きくなるわ……はふう……」

彼女のメガネの奥で、瞳がどんどん潤んでいる。

レンズを通して見る潤み目は、ひどく扇情的で、オレの心を鷲づかみにした。

チンポを扱くだけで発情するメガネ女子は、ほんと可愛いぜ。

お陰でチンポが一段と硬くなる。

ますます、女好きする硬質チンポになっていくんだよ。

「うっ……おっ……」

と、性感混じりの膨張感が腰の奥から上ってきたと思つた矢先、先割れしている亀頭の先端から、透明な汁が溢れ、丸くまとまつた。

先走り汁だ。

「んっ……久しぶりのエッチ汁の放出感だぜ……先走りが出ただけだけど、かなり気持ちいいな」

「いつもより早いわね……んっ……んっ……」

「はふう……溜めこんでたからなあ。もつとも、リョウコの手コキが上手いからって理由の方が主要因だけどな……ん……」

「あら、わたしのご奉仕は、こんなものじゃないわ……ぺろっ」

挑発的な眼差しを投げかけたリョウコは、なんと舌を伸ばし、亀頭の先で丸まっていた汗の雫を舐めとった。

「んく……ちよつとしよっぱいこの味……久しぶりよ……ぺろ……ぺろ……」

女子校生らしい、ピンク色の可憐な舌で、あろうことか排泄器官でもあるペニスの先っぽを舐めては、出てくる先走りの雫を何度も何度も舐めとる。

「ううっ……それイイぞ、リョウコ……っ」

オレは快感に打ち震えた。

相変わらず彼女のやり方には、イヤイヤやってる雰囲気はない。

丹念に舌を這わせ、先走り汁を飲み下してくれているのだ。

こんなこと、普通の女はまずやらない。

オレの脳裏に、オシヤレに気を遣い、オレみたいなブサイク男子を嘲笑し、イケメンに色目を使う同年代の女子らの様子が浮かぶ。

あんな連中とリョウコは、比べるべくもない。

こんな子をカノジョにできて、ほんとよかった。

チンポを熱くし、舌愛撫の快感を楽しむオレだが、限界は近かった。

先走り汁が上がってくるより重厚で、おまけに、切迫した快感を伴う情動が、腰の奥で急速に膨らんでいるのだ。

「まずい……そろそろ出そうだ……リョウコ……くふう……ッ」

「うん、分かってる。あなたのチンポ、すごくビクビクしてるもの……ぺろぺろ……んく……先走り汁の量が増えて、味も苦くなってきたるし……ちゅぷ……」

「このままいいか……？」

「構わないわ……ちゆる……あなたが飲ませるのが好きなのは、誰よりもわかってる……れろれろ……禁欲してたんだし、好きなように出させてあげないのは可愛そうよ」

「リョウコ……っ」

「久しぶりだからね……わたしも……すごく飲みたい気分……」

「リョウコッ」

「ちゃんと、最後まで気持ちよく性欲処理してあげるわ……濃いのをいっぱい出してよね……はむっ」

なんとリョウコは、今にも爆発しそうなチンポの先をくわえ込んだ。

「んふう……じゅるる……じゅるる……じゅぼっ、じゅぼっ……！」

スツキリした頬をすぼめ、射精間近の敏感チンポに口内粘膜で広く吸い付きながら口ピストンし、ポニーテールの艶やかな髪を下品に弾ませる。

「うお……うおおおッ……リョウコの口の中……気持ちいいッ！」

オレは思わず叫んでしまった。

彼女の温かくて柔らかくてよくヌルっている粘膜は、絶頂間近の敏感亀頭には、至福の感触だった。

物を食べたり、キザなことを言うオレに「ばか」と言ったり、学園の委員会活動では図書委員の仕事に必要な真面目なことを言ったりしてる口は、チンポを気持ちよくするため肉穴になっても、すこぶる魅力的だ。

亀頭のカリを少し超える程度の短いストロークだけど、口内粘膜にピツチリ包まれ、じゅぶじゅぶという水音混じりに扱かれるチンポは、一気に熱くなった。

彼女の清楚な舌は、下唇に触れながら固定されている。口内粘膜よりも分厚くて、味蕾の凸凹がいっぱいある舌で裏筋が常に引っかかれる快感も、背筋をゾクゾクさせた。

おまけにリョウコは、口ピストンだけでなく手淫もしてくれている。

チンポは、どこもかしこも気持ちよかった。

気持ちよすぎた。

フルン♥ フルン♥ フルツ♥ フルツ♥ ヒクン♥ ヒククク♥

そつと目を閉じ、オレのチンポの感触と反応に集中しながら手コキフェラしてくれるリョウコは、姿態も素晴らしい。

重力に引かれるオツパイが、ご奉仕の振動に合わせて揺れる様子も、先っぽの乳首が勃起してる様子も、四つん這いでお尻を突き出してるからこそその首の後ろからお尻にかけてのS字ラインも、オレの性欲を刺激してやまない。

美白肌で、シミもあばたもないリョウコだから、眺めのよさは折り紙付きだ。

こんなにエロい女の子とエッチ……いや、そんな大人しい呼び方じゃダメだな。セックス……エロいことができるなんて、マジ最高……!!

「リョウコ、エロすぎ！ 他の女子なんて目じゃないぞ！ おおお、オレのリョウコに手コキフェラされながら精液出すぜ……!!」

久しぶりのセックスを楽しみたくて、尻の穴に力を込めたり、微妙に腰を動かしたりして、彼女の口内粘膜とチンポの敏感すぎる部分が当たるのをずらし、射精を先延ばししてみただけ、すぐに無理になった。

オレはリョウコの好意に甘え、そのまま口の中で絶頂快感を貪りにかかる。

「リヨウコ、もうほんとに出るっ、頼む、このまま精飲を……オレが射精する間中、チンポ汁を吸い上げて飲んでくれ！ うおおおッ！」

「いいわよ、んじゅっ、んじゅるる、んふー、ふーっ、射精してるときもちゃんと気持ちよくし続けるから、いっぱい出して♥ んもっ♥ んも♥ じゅぶぶぶ♥ 溜まっていた濃い精液をたっぷり排泄して飲ませて♥」

手コキフェラの合間を縫って嬉しすぎることを、しかもオレと目を合わせて言いながら、ラストスパートをかけてくれる。

残像ができそうなレベルに手も頭も動かす。これまで以上にチンポに食らいについて、吸いつきながら、目の前で火花が散り続けるまでの鋭いチンポ快感を味わわせてくれた。

「うはあっ！ リヨウコの手コキフェラ、マジ最高！ おおおッ、チンポ汁出る！ こんなの我慢できるわけない！」

ドビユウウウウウ！ ドビユルルルル！ ドビユブウウウウウウウウウウウ！  
腰を快感痙攣させながら射精するオレ。

それにリヨウコは……。

「んむうう！ んぐっ………じゅぶる、じゅるる………コクン………コクン………」

射精を受け止めた瞬間、驚いた風な声を上げたが、すぐに落ち着いた。

チンポの先を喉の奥に当てるまでくわえ込んで、吸い上げ始める。

喉の奥は過敏な部分。誰でも訓練なしにチンポを受け止められるものじゃない。

オレのために時間をかけて練習し、馴れてくれたんだよなあ。

大事なオレのカノジョは、ほんとに女神じゃなからうかと、こんなときはよく思う。

ビュブウウウウ！ ドグウウウウ！ ビュグドグウウウウウウウウウウ！

カノジョの厚意に甘えるオレは、喉の奥でも遠慮なく放ち続ける。

男の射精は普通、十秒前後で終わる。だが、エロ面で鍛えてるオレは違う。体調やプレ

イにもよるが一分だって……場合によってはそれ以上も続くのだ。その間リョウコは、

「んふうっ……はああ……濃い……おいしい……♡ この青臭さと舌が痺れる苦み、久

しぶりよお♡ ……んぐ♡ ……じゆるるる♡ ……んふー♡ ……じゅぶぶぶっ♡ ……

…喉に絡みついて♡ ……なかなか落ちていかないわ♡ コクン♡ ……コクン……♡」

粘っこい吸引音を響かせて、バキュームしてくれていた。

大人の女でもそうそうできない、喉の奥までくわえ込むという芸当をやったのけてるが、

ケロリとしている。

文句めいたことを口走るけど辛そうな様子はなく、顔は汗を浮かせて上気している。

吸い上げては、白く細い喉を鳴らす仕草に、雑な気持ちは少しもない。



しかも、どことなくニヤけながらしてくれてるんだよ。

コイツ……嬉しそうに精飲してくれるよな。

最初の頃は、当たり前前にイヤそうにしてたんだよ。

でも、エロいこと大好きなオレが、おだてたりなだめたりしつつ、なんとかここまで仕込んだんだ。

オレ好みに染まったりヨウコは今や、セックス大好き女子校生。

もつともそれは、オレといるときだけ。

オレだけが、こんな横顔を知っている。

学園では、地味で真面目なメガネ女子のまま。

誰も知らないんだよ。

このことは、男の下品な支配欲というか独占欲というか、そんなものを刺激する。だからこそ、ご無沙汰だったのを差し引いても、精液がいつぱい出て、チンポは格別に気持ちよかった。

「はあ……マジ最高……可愛いカノジョの可愛いおててとお口でヌイてもらおう至福はどうよ……生きてるのはイイことだぜえ……」

「女の子に……それも、カノジョに精液を飲ませるなんて最低なこととして気持ちいいだな

んで、男ってほんとバカよねえ……んくっ……ごくん……はふうっ……バカなカレシの精液だけど……んっ……はああ……おいし……い……い……♡」

甘噛みする子犬みたいな顔で言ってくるリョウコだが、精飲は続けてくれている。もちろん、所作はぜんぜん雑じゃない。

「バカな男に付き合ってくれてるリョウコは、マジ女神さまだよ……ふう……世界中の女子の中で一番可愛いぜ」

「ふん……だ……」

リョウコは流し目で目を逸らす。

こいつ、照れてるな。

可愛い仕草しやがるぜ。

エロ奉仕してくれてるときにされると、チンポがもつと元気になる。

びくんっ……びくんっ……びくくく……！

ひとしきり射精したチンポが、カノジョの口の中で元気に跳ねた。

「やっぱり、一回じゃ足りないわよね。あなたってば、禁欲してないときでも、一回や二回の射精じゃ満足しないドスケベだもの……友達の話で出てくるカレシとは、精力方面でもぜんぜん違うのよねえ……ねえ……このまま口で、連続イキ……させてあげる……？」

今度は、どんな風にシテあげよつか……？」

普通の男は、一度射精するとチンポは萎える。

強引に刺激しても、腰が引けたり、逆に辛かったりするのだ。

けれど、オレは違う。

リョウコとセックスしまくる前から、オナニーをやりまくってた。

だって、簡単に気持ちよくなれて楽しい気持ちになれたから。小さい頃から勉強に馴染めず、女子にブサイクと嘲笑されてきたストレスの、なによりの解消法なのさ。

そこいらのスケベ男子とは年季も鍛え方も違うオレは、すぐに二回目三回目に突入できるんだよ。

オレの精力や性欲が抜群なのは、リョウコもよく承知している。

「いや、いい」

オレは即座に辞退した。

「え……」

すると彼女は、鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をする。

「聞き間違いかしら……いま、いいと言ったの？ 遠慮したの？」

「おう。遠慮するぜ」

「……具合悪いの？ ああ、でも、チンポはこんなにカチカチなのに……さっきの射精も、濃いのがたっぷり出たわよね……なのに……ねえ、どういいうつもり？」

「簡単なことさ」

「簡単なことなの？」

「今度は、リョウコの胎内で気持ちよくなりたい」

「……ッ」

「手コキフェラしてくれる手も口も最高だけど、リョウコのナカは、もっと最高だもんな。早くそいつを堪能したいのさ」

「ほんと……男って……わたしのカレシって、ドスケベのバカなんだから……」  
心配顔になっていたリョウコが、深い溜息を吐いた。

「しょうがないわね」

彼女はゆっくり離れていく。

どうやら、合体の準備をしてくれるらしい。

しめしめ。

信じてくれたぞ。

オレの言ったことは本音だけど、方便も混ざってるんだよな。

それに彼女は気付いてない。

よおし、今日のために考えていた計画を、このまま成功させてやる。

オレは彼女が体勢を変えるのを見ながら、ひそかにほくそ笑んだ。

※ご覧下さり、どうもありがとうございます。

体験版はここまでです。

続きは製品版でお楽しみください。

製品版では続きである、後背位と正常位のシーンをお楽しみいただけます。

ご覧下さり、どうもありがとうございますございました！

奥付

●制作●（二〇二〇年九月現在）

・文章他 木森山水道（別名義 きもりや）（サークル 夜山の休憩所）

ブログ <http://kimoriyamasuidou.blog115.fc2.com/>

ツイッター <https://twitter.com/kimoriya2>

ノクターンノベルズ <http://syosetu.com/usernovel/list/>

ピクシブ <https://www.pixiv.net/novel/member.php>

ニジエ <http://nijie.info/members.php?id=987459>

・挿絵

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」(G・J?社)

「セックスライフ」(G・J?社)

公式サイト <http://www.teck.jp/gj/>

利用規約 <http://www.teck.co.jp/gj/products/sano/qa/qa.html>

「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」のシリアル S/N:GJ0079908

● CM 雑誌読み切り編 ● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「魔王堕ち聖母マリナ 淫欲に寝取られる勇者たち」

挿絵 阿呆宮 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百十号「悪堕ち」特集号（KTC社刊）

\*同誌は百九号より、電子書籍のみの販売となりました。

「地球警備隊ツイン・スター 不可逆のTS孕ませ陵辱」

挿絵 きばすけ 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百七号「性転換孕ませ」特集号（KTC社刊）

「絶対無敗騎士キリイ・タイム」

挿絵 トモセシユンサク 先生

掲載誌 二次元ドリームマガジン百号「二次元エンド」特集号（KTC社刊）

\*百号記念号にして、内容も付録も大充実の永久保存版です！

●CM 単行本編● 小生の商業作品にはこんなものがございます。

「トリプルナイツと触手の王 寝取られTS王子も墮ちる孕ませ魔ハーレム」

挿絵 孤裡精 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「健昂優良ビビッド・ガール 淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン」

挿絵 sue 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「学園天使ツイン・セーフティ くヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦」

挿絵 洗面きぬ子 先生      メディア 電子書籍専売品（KTC社刊）

「ツイン・アルステラ 調教洗脳で悪堕ちする正義のヒロイン」

挿絵 こうきくう 先生      メディア 単行本と電子書籍（ともにKTC社刊）

以上はほんの一例です。通販サイト様、電子書籍ショップ様にて、

「木森山水道（きもりやますいどう）」では非ご検索ください。



逆襲の魔王は  
最強の騎士の  
スベテを寝取る。

三次元ドリームノベルズ

トリプルナイツと触手の王  
寝取られTS王子も墮ちる孕ませ魔ハーレム

挿絵：孤裡精(こりせい)先生  
小説：木森山水道(きもりやますいどう)

電子書籍販売店さまにて好評発売中！

トリプルナイツとしょくしゅのおう





二次元好き向け雑誌、  
二次元ドリームマガジン110号  
（「悪堕ち」特集）に読み切り短編、  
「魔王堕ち聖母マリナ  
淫欲に寝取られる勇者たち」掲載！  
（絵 阿呆宮先生 小説 わたし）

キーワードは、  
「寝取り」、「寝取られ」、「NTR」、  
「悪堕ち」、「未亡人」、「ママ」、  
「幼馴染み」、「ツインテール」、  
「中出し」、「エロラノベ」etc.

おうちでいっぱい楽しんで♡

公式サイト（KTC社サイト内）  
[http://ktcom.jp/2d/2d\\_110](http://ktcom.jp/2d/2d_110)

キルタイムデジタルブレイク  
（出版社の直営店）

[http://ktcom.jp/shop/  
products/detail.php?  
product\\_id=3845](http://ktcom.jp/shop/products/detail.php?product_id=3845)

このイラストの作者  
わたしこと木森山水道



わたしってば、スポーツが好きすぎて  
**変身ヒロイン**になっちゃった!

えっ、この星からスポーツがなくなる?  
防ぐには、こんな**エロ競技**で  
勝たなくちゃいけないってウンでしょ!?

あちゃー……**エロ競技**で組んだ、  
**転校生**で**イケメン**で**ゴリマッチョ**で  
**アレ**がもの凄い**クラスメイト**に、  
ちょっと**メロメロ**になっちゃったら、  
**幼馴染みのアイツ**ったら、  
超イライラしてるわ!

いったいどうなっちゃうのよ!?

けんこうゆうりょう (挿絵: sue先生 小説: 木森山水道)

そんな、「**健昂優良ビビッド・ガール**  
**淫らな体育祭で寝取らる淫紋ヒロイン**」  
は、電子書籍販売店さまで好評発売中♥

あなたもわたしとの**シコシコ運動**で、  
**キモチイイ汗**かこ♥

ビビッドガール

検索

ククク……  
青空の学園のグラウンドで、  
あの「健昂優良ビビッド・ガール」に  
こんなにねちっこく  
奉仕してもらえるとは

体育会系の正義の変身ヒロインは、  
悪との戦いやスポーツだけでなく、  
パイズリとチンポ舐めも、なかなか上手い  
ずっとして欲しいくらいに最高の気分だ

「健昂優良ビビッド・ガール」  
淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン！  
電子書籍販売店さまで好評発売中！

ビビッドガール 検索 カチッ♡

うう……こんなに舐めたり吸ったりして、  
ローションを塗りたくったオツパイで、  
一生懸命ヌルヌル扱いしたりもしてるのに、  
ぜんぜん倒れてくれないだなんて……  
このオチンチン凄すぎるう……

ああ……ドキドキする……  
アソコが熱く疼いて堪らない……  
○×も見るけれど……  
こうなったら……もう……

ギンツッ！

ギンツッ！

ずいゆ

れる

ぷぷっ

じゅずずっ

ずりゆりゆ

にゅるっ

びんツッ！

びんツッ！

### 没エロ競技「棒倒し」

男子の硬くそそり立つ「棒」を、  
女子がカラダを使って倒し、  
(射精させ)その数を競う。

体育祭実行委員が配る  
ローションなどのアイテム使用可。

色々なお店で販売中です！

夜のお供に是非どうぞ♡

学園天使ツイン・セーフティ

検索

by「学園天使ツイン・セーフティ

～ヤリチンDK怪人 卑劣な寝取り調教作戦～」

小説 木森山水道

挿絵 洗面きめ子 先生

出版社 KTC社

(二次元ドリームノベルズ) (電子書籍専売レーベル)

\*コメント、RT、いいねなどに感謝！

既におの方もこれからの方も、

ご購入ほんとうにありがとうございます！

画 木森山水道



新年明けましておめでとうございます！

旧年中も応援ありがとうございました。  
本年もどうぞよろしくおねがいします。

2020年—お正月—木森山水道(きもりやますいどう)、きもりや



モデルは拙作

「ツイン・アルステラ  
調教洗脳で悪堕ちする  
正義のヒロイン」

(挿絵 こうきくう先生)の  
星振美月ちゃんです。

教師のわたしと女子校生の娘……  
母娘変身ヒロインがHな目にあう小説、

「変身母娘ビューティクラフト

墮としあう母娘は悪に染まる」は、好評発売中です♡  
わたしたちの痴態を是非、ご堪能くださいね♡

